

# シュタイナー幼稚園における教育実習を通した 学びの実態に関する考察

A Study of the actual state of learning through teaching practice  
in Waldorf Kindergarten

近 藤 千 草  
(Chigusa KONDO)

## 要 旨

本稿の目的は、シュタイナーの教育思想に基づく幼稚園において4週間の教育実習を行った学生が、どのような点を学びとしたかその実態を明らかにすることである。教育実習終了後、実習生に対するヒアリング調査を行った結果、「実習前」においては、シュタイナー幼稚園の保育内容や方法に対して、「気難しさ（特殊性や絶対性）」をイメージとしていたが、「実習中」には、①自然で素朴な素材で囲まれた環境の中で、子どもが想像力豊かに見立てをしながら遊びを展開していること、②保育者の模範的な態度を子どもが模倣しながら遊びを豊かにしていくこと、③活動内容にはシュタイナーの人間理解が浸透し、子ども一人ひとりを尊重しながら援助していく方法が徹底していることについて理解していた。「実習後」には、シュタイナー幼稚園で学びと認識した事項を、自身の保育観に近い価値として認め、進路選択につなげる意欲を生み出していたことがわかった。

キーワード：ルドルフ・シュタイナー シュタイナー幼稚園 シュタイナー幼児教育 幼稚園教育実習

## 1. 研究の目的

ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner 1861-1925）の人間学に基づく幼児教育施設（幼稚園・保育園・こども園・他等）や学校は、今日の我が国において広く一般に知られるようになり、学校選択の一つとして認知されるに至っている。我が国にあるシュタイナー幼児教育施設の設置形態をみると、NPO法人、一般社団法人、社会福祉法人、個人立など様々であるが、その中で「学校法人」の幼稚園として国の基準に則りつつ、シュタイナーの人間学を根底にした幼児教育を実践している園がいくつか存在する。本稿で取り上げる園は、学校法人立でシュタイナー幼児教育を展開する幼稚園（以下、「M幼稚園」と示す）である。

筆者の所属する本学は、幼稚園教諭養成課程を持つ大学であり、これまで多くの幼稚園において教育実習を行ってきた。しかし、シュタイナーの人間学に基づく幼稚園（以下、「シュタイナー幼稚園」と示す）において教育実習が行われたことはなく、2023年度が初めてのケースとなった。M幼稚園で実習を行うこととなった実習生（以下、「実習生Y」と示す）は、シュタイナー幼児教育

というこれまで経験したことのない理念や教育内容・方法等に対してどのように向き合い、どのようなことを学びとしたのであろうか。また、シュタイナー幼稚園における教育実習は、保育者養成における学びの場として意義を見出すことができるのであろうか。

シュタイナー幼稚園における教育実習を通した学びに関する研究の動向を CiNii Research にて調査を試みた。その結果、「幼稚園教育実習」のキーワードでは386件が検出されたが、「シュタイナー幼稚園」という枠組みにおける教育実習に対する研究報告は見当たらない。そこで本稿では、シュタイナー幼稚園における教育実習後に、実習生 Y に対するヒアリング調査を行い、シュタイナー幼稚園での教育実習の実態と学びの様相について明らかにしたい。

## 2. 研究の方法

シュタイナー幼稚園で教育実習を行った実習生 Y（4 年次）を対象とし、教育実習後にヒアリング調査を行った。半構造化ヒアリングにより、実習生 Y の教育実習を通した学びについて分析を行う。ヒアリング概要は下記の通りである。

対象者：2020年度入学生 実習生 Y（2023年度 4 年生）

実習園：M 幼稚園

実習園所在地：東京都

教育実習日程：2023年 5 月 8 日（月）～6 月 2 日（金）

研究方法：半構造化ヒアリングにおいて音声を録音し、録音内容をボイスライト後、記録内容から教育実習を通した学びの観点について抽出する。

ヒアリング調査日：2023年12月11日（月）13：00～14：35

場所：本学筆者研究室

ヒアリング項目

＜実習前について＞

- ①実習先の決定方法
- ②シュタイナー教育を行っていることはどのように知ったか。
- ③シュタイナー教育に基づく教育実習を行うことに対する気持ちはどのようなであったか。
- ④シュタイナー教育に対する印象
- ⑤オリエンテーションではどのような指導があったか。
- ⑥どのように実習準備を行ったか。

＜実習中について＞

- ①シュタイナー教育を基盤とした教育実習の難しさは何か。
- ②シュタイナー教育を基盤とした教育実習の楽しみは何か。
- ③これまでの保育所実習での経験はどのような点が生きたか。

- ④これまでの保育所実習での経験では補えない点は何か。
- ⑤シュタイナー教育における印象的な内容はどのようなものであったか。
- ⑥シュタイナー教育における保育者の援助で印象的な場面はあったか。
- ⑦シュタイナー教育における子どもの印象的な遊びや姿はあったか。
- ⑧指導案はどのような内容を作成し、実践したか。
- ⑨日誌はどのように記入したか。シュタイナー教育の特色についての記録はあったか。
- ⑩シュタイナー教育の魅力はどのような点にあると感じたか。

＜実習後について＞

- ①シュタイナー教育実践園での実習によって変化した点はあるか。
- ②今後の保育の仕事にどのような点が生かせるか。
- ③シュタイナー教育の課題はどのような点にあると思うか。

倫理的配慮：ヒアリングに先立ち研究の内容を伝え、録音とヒアリング内容の掲載についての許可を得た。また、実習を行った M 幼稚園に研究の意図を伝え、実習生のヒアリング内容及び実習における日誌等の記録媒体の使用許可を得た。（2024年 8 月15日）

### 3. シュタイナー幼稚園における教育実習の背景

「教育実習」は、教育職員免許法に基づいて行われる教育免許取得のための必須科目である。教育職員免許法（令和 4 年法律第40号による改正 令和 4 年 7 月 1 日施行）の第二条（定義）には、「教育職員」として「幼稚園」、「幼保連携型認定こども園」の「主幹教諭（幼保連携型認定こども園の主幹養護教諭及び主幹栄養教諭を含む。以下同じ。）、指導教諭、教諭、助教諭、養護教諭、養護助教諭、栄養教諭、主幹保育教諭、指導保育教諭、保育教諭、助保育教諭及び講師」が位置付けられている<sup>1)</sup>。ここに示される教育職員は、「各相当学校の教諭の免許状」を有していなければならない<sup>2)</sup>。四年制大学の教員養成課程において幼稚園教諭免許状を取得するためには、平成31年（2019）4 月から改訂された「教育課程コアカリキュラム」に則り、一定の科目単位の取得が求められている<sup>3)</sup>。幼稚園教諭免許状取得のための教育課程コアカリキュラムの構成は、「領域及び保育内容の指導法に関する科目」（16単位）、「教育の基礎的理解に関する科目」（10単位）、「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」（4 単位）、「教育実践に関する科目」（7 単位）、「大学が独自に設定する科目」（14単位）から成る。教育実習に相当する「教育実践に関する科目」（7 単位）の内、教育実習は5 単位であり、内 1 単位は実習事前・事後指導が含まれる。本学においても教育職員免許法及び教職課程コアカリキュラム規定に則り、教職課程科目の運営及び教育実習の実施に当たっている。

本学における幼稚園教育実習は、4 年次の前期に位置付けられ、2023年度は在籍者142名中、122 名が教育実習を受講した。実習園の多くは学校法人であり、一部、宗教法人なども含まれる。教育実習園の配属は、学生の希望を踏まえながら、大学での調整を基本としている。2023年度における

教育実習園の内1園が、シュタイナーの人間学を基盤としたM幼稚園であった。実習生Yは、実習先の配属時にM幼稚園のホームページを見てシュタイナー教育を取り入れている園であることを知ったが、この段階では特段の違和感は捉えておらず、M幼稚園での教育実習が決定した。その後、実習生Yは改めてホームページを見返すが、その時点で「特殊な教育」という印象を抱いている。M幼稚園のホームページ「教育方針」の箇所には、「シュタイナー教育について」と題し、次のような説明が載せられている<sup>4)</sup>。

「ルドルフ・シュタイナー博士（1861～1925）は身体と心と頭のバランスを大切にした教育を唱えました。そして、身体の基本がつけられる0～7歳・心が育つ7～14歳・思考が働く14～21歳と7年周期で順番に育まれていくことに深い意味を見出し、人間的な成長の確かさがあると考えました。誕生から7歳までに育つ大切なことについて下記のようにあげています。

①生涯を支える健やかな身体 ②意志（成し遂げようとする力） ③想像力

それらは、子どもがのびやかに手足を動かして生活し遊ぶなかで豊かに育まれていきます。私たちは、幼児期によく動く身体・みずみずしい感覚を養うことが心を豊かにし、頭を賢くしていくと考えます。例えば、外遊び・散歩で調和的な筋力がつくことは、姿勢がくずれにくくなり集中力・持続力につながります。また、質の良い玩具や教材からひきだされた遊びは想像力を鍛え、その後の学習や人間関係に必要な能力に変わっていきます。

これらのことは、最近の幼児教育で重要視されている「非認知能力」に通じるものでもあります。

M幼稚園では、日本の文化を基盤におきながらシュタイナー教育の発達理論を取り入れた保育をおこなっています。」

さらに、「シュタイナー教育の発達理論を取り入れた保育」の実現に向けて、次の4つの実践目標が掲げられている<sup>5)</sup>。

- ①健やかな身体作り―静と動を織り込んだ園生活・緑の中で伸び伸びと遊ぶ
- ②生きる力をのびやかに―日本の祝祭を大切にした季節感あふれる園生活
- ③豊かな感覚を養う―美しく・穏やかな環境・本物の素材からできた教材
- ④意志を育む―充実した自由遊び・想像力を広げるおもちゃ

実習生Yは、ホームページに示された内容を確認し、自身が大学の授業の中でシュタイナーについて学んだことを回想するが、授業の一部で触れていたものの、その具体的な実践や内容について深く知る機会を得なかったことを振り返り、そこで初めて不安が生じたという。実習生Yは、実習訪問担当であった筆者に、シュタイナー幼児教育に関して学べる文献を紹介してほしいと申し出、そこで筆者は、文献『日本のシュタイナー幼稚園』<sup>6)</sup>を貸し出した。本文献には、我が国のシュ

タイナー幼稚園における一日の流れや保育内容が示されており、シュタイナー幼児教育の特質をつかみやすい。実習終了後に文献を返却された際、「シュタイナー幼児教育の特徴をつかんでから実習に入ったことによりスムーズな理解につながった」と実習生 Y は感想を述べている。

実習生 Y は「特殊な教育」と述べていたが、シュタイナー幼児教育の教育理念や保育内容・実践には、どのような特性が内包されているのか次項において捉えたい。

#### 4. シュタイナー幼稚園における幼児教育の特徴

我が国で一般的に呼称される「シュタイナー幼稚園」は、ルドルフ・シュタイナーの人智学思想（Anthroposophy）に基づいて、1919年に創設された「自由ヴァルドルフ学校（Freie Wardolf Schule）」附属幼稚園として、1926年にエリザベス・グルネリウス（Elisabeth Marie Adelheid von Grunelius 1895－1989）によって設立されたことを端に発する。設立以来その数は増加し、世界の園・学校数を示す“Waldorf World List2024”には、世界1922園の乳幼児施設が認められ、我が国には15園の登録が見られる<sup>7)</sup>。我が国においてシュタイナー保育・幼児教育を実践する園の全てが組織に加盟しているわけではないことから、その数と実態の全貌をつかむことは難しい。また、名称も「こども園」、「おうち」、「子どもの家」、「〇〇園」のように多様である。実習生 Y の教育実習園は、学校法人立であり、『幼稚園教育要領』に則りながら、シュタイナーの教育理念を柱として幼児教育実践を行っている幼稚園として位置付けられている。

M 幼稚園における保育の流れと内容は、次の通りである<sup>8)</sup>。

##### 【M 幼稚園の保育の流れと内容】

- 9：00 自由遊び（室内）
- 10：30 朝の集会 ライゲン
- 11：00 園庭遊び 土手散歩
- 12：00 素話
- 12：15 昼食
- 13：00 食後の自由遊び
- 14：00 降園

（その他の活動：水彩、お誕生日会、オイリュトミー）

シュタイナー幼稚園の特徴的な保育内容がいくつかある。その一つは、「ライゲン（Reigen）」である。ライゲンは、保育者が先導して歌や詩を唱えながら、子どもがそれに合わせて動作を行う活動で、「リズム」と「言葉」と「動作」が一体となってライゲンのテーマを表現する。ライゲンの特徴は、①身体に意識を向けること、②自然（動植物）、季節、気候、四大元素の自然現象を取り扱うこと、③動き、言葉、音の組み合わせと体全体を通したリズムがあることであり、生活との

密接な結びつきを意識させる点にある。近年では、多くの幼稚園や保育園等において「リトミック」が取り入れられており、一見類似した活動内容にも思える。しかし、リトミックは、音楽を通して身体表現を行うことに特徴が見出され、言葉（語りや詩の唱え等）が含まれていない点が異なる。グルネリウスはライゲンについて、「唱歌劇（ジングシュピール）は子供たちにとって喜びであり、子供たちの生活のためにも役立ってくれます。劇の進行ともなつてゆっくりと歌うことは、子供たちの音程を聴きとる能力や音の高さに合わせて歌うための良い機会でもあります」<sup>9)</sup>とその意義を述べる。

二つ目は、「素話」で、シュタイナー幼稚園の設立当初から、グルネリウスは素話、すなわち「お話し」とイメージ力の関係性についてその重要性を語っている。グルネリウスは、「本を読んできかせるよりも、自由に物語をしてきかせるほうがよいのです」<sup>10)</sup>と述べ、お話を聞く子どもにとって大切なことは、登場人物の一举手一投足が具体的に物語られ、その具体的な描写によって子どもの心を引き付けることである。この意味において、深い人間への洞察に貫かれ、心の純粋さや勇敢さ、親切心、あるいは非利己的な考えや悪しき性質等、様々な人間の心的な部分に触れているグリム童話は優れていると考えている。善悪の観念は、子どもにとってイメージと結びついて初めて生き、内的な体験となっていく。よってお話の時間は、「人間の内面生活におけるこのうえもなく深くで繊細な心の営みを教える、きわめてたいせつな教育の機会」<sup>11)</sup>とグルネリウスは捉えている。

三つ目の「お誕生日会」は、多くの幼稚園で実施している内容であるが、シュタイナー幼稚園のお誕生日会の特徴は、一人ひとりの誕生日を祝うことである。M 幼稚園のパンフレットには、「ご両親の愛情に包まれて、生まれてきたこと。多くのひとに大切に见守られ、大きくなってきたこと。お誕生日会では、お母さまからうかがったエピソードを担当が子ども達にお話します。ひとりひとりが尊い存在であることを深く実感します」<sup>12)</sup>と誕生日会の意義を示している。

四つ目は「オイリュトミー」(Eurythmy)である。シュタイナーによって考案されたオイリュトミーとは、「美しいリズム・美しい調和」を意味する造語であり、我が国においてオイリュトミーの第一人者である秦理絵子氏によれば、「オイリュトミーは、全身にひろがる言葉であり、歌です。普段は喉で行うことを、腕の身振りを中心にして全身であらわし、空間の動きを通して『みえる言葉』『みえる歌』にします」<sup>13)</sup>と説明される。オイリュトミーはシュタイナー学校の必修科目となっており、子どもの生命力や直観を育む重要な教育内容として位置づいている。オイリュトミーは、学童期のみならず幼児期においても取り入れられ、また、大人のためのオイリュトミーも用意されている。幼児期のオイリュトミーについて秦は、「子どもたちは輪になって、オイリュトミー教師が語る短い言葉やお話、昔話を全身で聞き、その身ぶりを写し取ります。つま先でちょこちょこ歩いたり、強く踏みしめたり、様々な歩みをし、体と心の成長を助ける子音や母音を、シンプルな動作で動きます。題材は季節ごとに変化していき、手遊びや足遊びの要素を取り入れて、小さな子どもの体をリズムある動きへと導いていきます。出来栄とか習得の早い遅いは問題にされません。

子どもたちの身心が、楽しく動きの中で息づくことだけが大切です。そのようにオイリュトミーを定期的に体験することによって、『まっすぐに立って歩き、話し、考える』三つの力は、しっかりと子どもの中に根付き、将来、子どもが自分自身になっていく大きな助けとなるのです」<sup>14)</sup>と幼児期のオイリュトミーの意義を述べている。

このような保育内容が、実際にシュタイナー幼稚園の中でどのように実践されているのか、実習生 Y の教育実習での体験を踏まえて以下、捉えていきたい。

## 5. M 幼稚園における教育実習を通した学びの実態—ヒアリング調査より

本項では、シュタイナー幼稚園で教育実習を行った実習生 Y に対するヒアリング調査から、シュタイナー幼稚園でどのような学びをしたのかその実態を捉えたい。以下、ヒアリング調査項目（「実習前」、「実習中」、「実習後」）に沿って調査結果を示すこととする。

### 5-1. 「実習前」に関する事項

実習生 Y のシュタイナー幼稚園との出会いは、教育実習園を選定する段階にあった。本学の教育実習担当者より実習園が提示された時、実習生 Y はホームページにおいて園の教育方針や内容等を確認しているが、その時点においてシュタイナー教育について違和感は捉えておらず、一般的な幼稚園のようなイメージを持つと共に、教育方針に対して共感できる観点が多くあったことから実習園として希望するに至った。実習生 Y は、「ホームページ上からはそんなに違和感なく、一般的な幼稚園というか、そんな感覚で希望しようと思いました。事前は良くわからず、自分から希望しました」と、実習園の選定時を振り返っている。教育実習のオリエンテーションに向けてホームページを再読していくうちに、ホームページ「教育方針」の欄からシュタイナー教育を行っていることを知り、そこで初めて「不安」が生じてきたという。大学における必修科目「保育原理」の教育思想を取り扱う箇所においてシュタイナーの名が出てきたことを振り返っているが、思い起こされることはシュタイナーについて「触れた」という程度の印象である。実習生 Y はヒアリングの中で、「そんなに深くは学んでこなかった教育法で、自分がそこに適応できるかどうか、不安だったというのを思い出しました」と回想した。しかし、不安はあったものの受け入れてみようとする心情を持つに至っている。不安に思う観点について実習生 Y は、「一日の流れとか、ざっくり載っていて。例えば、ライゲンとか、サークル活動とか特有のやってみることにに対して。自分もやってこなかったことなので、“はじめまして”のことが少し怖いというか、大丈夫かなと思いました」と、これまで経験したことのない保育内容や方法に不安を抱いていたことがわかる。シュタイナー保育の内容や方法に対して実習生 Y は、「扱いが気難しい」のではないかと想像していた。「気難しさ」とは、内容の「特殊性」や方法の「絶対性」を意味しており、これまでに保育経験がない状況から、シュタイナー教育は「扱いづらい教育」という印象につながっていた。

実習オリエンテーションが開催され、資料に基づきながら M 幼稚園の設立経緯やシュタイナー

教育との出会い、園児数や職員数、保育の一日の流れや内容について説明を受けた。M 幼稚園は、1953年（昭和28年）に認可幼稚園として開園し、1985年（昭和60年）に学校法人としての認可を得、本年で71年目を迎えている。1979年（昭和54年）にシュタイナー幼児教育との出会いを果たし、その後、M 幼稚園にシュタイナー幼児教育が取り入れられてから現在まで45年となり、歴史あるシュタイナー幼稚園と言える。園では、シュタイナーの発達論としての感覚を豊かに養うこと、意志を培うこと、想像力を広げることを重視して保育を展開している。保育の一日の流れについては3歳児を例にとり、次のような流れが説明されている<sup>15)</sup>。

<一日の流れ>

8：00 朝の預かり保育

9：00～09：15 登園

～10：00 室内で自由

10：20～11：40 朝の集会・トイレ

園庭遊び又は土手散歩

11：40～14：00 素話

昼食

自由遊び

帰りの集会

降園

M 幼稚園では、保護者と一緒に登園することとなっており、登降園の時間に保護者とゆっくりと歩きながらコミュニケーションを取る時間を重視している。登園後は室内での自由遊びとなり、子どもが自ら遊びを見つけ出し、想像的な遊びが展開されるように保育者は配慮していく。室内の自由遊び後は、朝の集会に向けて片付けと環境構成が行われる。朝の集会では保育室に椅子を丸く並べ、子どもたちは中心を向いて座る。保育室のカーテンは閉められ、電気は消される。保育者は輪の中央に設置された台にキャンドルを設置する。集会では、保育者が詩を唱え、手遊びを行い、集会の最後には当番の子どもによりキャンドルスナッファーで火が消される。子どもたちは立ち上がり、保育者の誘導のもと季節の表現遊び（ライゲン）を行ってから、園庭への遊びへと入っていく。午後で特徴的な活動は素話であり、保育者が語る昔話に子どもたちは静寂な中で耳を傾け、メルヘンの世界を豊かに想像する。降園時には、保育者が子ども一人ひとりと挨拶を交わし、保護者へと引き渡す。

こうした流れについて説明を受けたのに加え、服装はスカートであることについては、やわらかい雰囲気を出すため、また、養護的な印象を子どもたちに持ってもらうためであること、異年齢保育については、4・5歳は年齢別のクラスはあるが、シュタイナー教育の教育方針に則って基本的に

は一緒に生活していること、玩具については、自然由来のもので、柄もない単色のものを使っており、子ども自らが何かに見立てて遊べるように必要以上に装飾はしていないことについて、説明を受けている。説明後に園舎内を案内してもらっているが、シュタイナー幼児教育ならではの特徴を聞くことにより、実習生 Y は、「自然に囲まれているというか、木とか、木材の温かみを保育室の中で感じましたし、すごい自然の中で生活しているんだろうなという印象はありました」と保育の特徴をつかんでいた。また、「おもちゃも保育所と全然違いました。本当に木の色そのまま。フライパンとかも本物の素材で、布も手触りのいい布がたくさんあったり。あと、フェルトもあって、本当に素材そのまま、加工されてないというか。実習中にこの辺りについてどう関わっていくか教えてもらおうと思いました。印象がだいぶ変わってきて」と述べ、実習前の不安な心情が、実際に保育環境を見ることによって興味へと変化していったことが捉えられる。

オリエンテーション後には、シュタイナー幼児教育についての調べを続行すると共に、教育実習に入るための準備を進めていく。実習生 Y は筆者の研究室を訪れ、シュタイナー教育に関する文献を読みたい旨を申し出ている。そこで筆者は、文献『日本のシュタイナー幼稚園』を提示した。本文を通し、さらにシュタイナー幼児教育のイメージが沸いたと感想を述べている。また、幼稚園のホームページに掲載している動画も見ること、「雰囲気を入力」していた。さらに、実習としては珍しいスカートであること、無地で発色が抑え目なベージュや淡いピンクの上着など服装の準備も行っている。指導案については、責任実習を中心に「はじき絵」、または「何らかの制作」を行うことを考え、日誌については、事前に記入可能な箇所の記入に取り組み、実習開始後に柔軟に対応できるように備えた。

以上のように、実習事前においては、シュタイナー幼児教育の特徴をつかむことに注力を注ぎ、その理念や方針に合わせて必要な物の準備や保育を学ぶ意識の形成が行われたことがわかった。責任実習を中心とした指導計画案については、実習開始後、保育の流れや内容、方法や理念等を踏まえ、保育者の指導に基づきながらシュタイナー幼児教育の内容や方法を学んでいこうとする意欲の表れも見られた。

## 5-2. 「実習中」に関する事項

### （1）シュタイナー幼稚園での教育実習の「難しさ」について

シュタイナー幼稚園において教育実習を行う難しさについて実習生 Y は、「お祈りの言葉とか、ライゲンをやりながら覚えるとか、シュタイナー教育の独自の取り組みを覚えていくのがまず難しかった」とシュタイナー教育独自の内容や方法の難しさが捉えられていた。もう一つは、「スカートで保育するというのが、最初はちょっとやりづらいなと思うところがありました」と、服装の在り方に関して難しさを感じていた。一般的に保育・教育実習においてスカートは皆無であり、大学における実習事前指導においても動きやすいパンツスタイルを推奨することが多い。実習生 Y も「なるべく動きやすい格好で今まで保育していたので、本当に逆で」と述べる。実習当初はスカー

トに違和感や戸惑いをもっていた実習生 Y であったが、「結構、丁寧な振る舞いになっていったか」と思います。あまり足を開きすぎても、スカートをはいている時の作法的にも合わないし、おしとやかというか、そのようになってたと思います」、「慣れてきてだんだん自然にそういう振る舞いになっていったと思います」とスカートによる動作の変化を捉えていた。スカートでの実習は、「全然悪くないなって終わり頃には思っていました」と述べる。スカートの丈は脛脛くらいという基準があり、そのようなスカートを準備して教育実習に入った。

シュタイナー幼稚園における教育実習の難しさについては、シュタイナー幼児教育ならではの内容や方法を「覚える」という大変さが指摘された一方、スカートで保育をするという「珍しさ」が強い印象に残っていた。スカートで教育実習をすることにより、保育をする身としてのふさわしい態度や振る舞いを意識することにつながったことが推察される。

## (2) シュタイナー幼稚園における教育実習の「楽しみ」と子どもの印象的な「遊びや姿」について

シュタイナー幼稚園における教育実習の楽しみについては、後のヒアリング項目「子どもの印象的な遊びや姿」と共通点があることから両観点からまとめた。

教育実習の楽しみの第一は、「子どもと一緒に玩具で遊ぶ時に、子どもが無垢な素材でどういうふう遊ぶかを一緒に見ていくこと」であった。実習生 Y が配属されたクラスでは、玉転がしが流行っており、「玉転がしが流行っていたみたいで、ブロックみたいなものと、本当に木の板を使っとうまく組み立てるんですよ、転がるように。子どもたちで意見を出し合いながら、ああしたほうがいい、こうの方がいいって作り上げていって」と、自然の素材を駆使して玉を「いかに転がすか」という視点から試行錯誤する姿を印象的と述べる。また、保育室にある「衝立」への関心も抱いていた。実習生 Y は、「衝立みたいなものがすごくたくさんあって、それを皆なで移動させて、おままごとしたり、衝立を使ってカウンターみたいにもして。区切りを作る役目で、ここからは私たちが使っているよ、というような役割も持っていたりして、衝立はかなりうまく活用していました」と衝立の活用方法を印象深く捉えていた。

教育実習の楽しみの第二は、「見立て遊び」について観察し、その意味を捉えることであった。保育室には自然の素材のみが配置されており、それらを用いて遊ぶ姿について、「木の実とか、丸い薄く切った木みたいなもので、それを食べ物に見立てていた」と述べ、その見立てが、「子どもによって見えるもの、見立て方が異なり、この子にとってはお米だけど、この子にとってはクッキーということで、同じ素材でも子どもによって見立てる対象物が違う」と述べ、「あそこまで想像を膨らませてというのは面白かった」と見立て遊びの実態について驚きを抱いていた。実習生 Y は、これまでの実習で出会った遊具について、「イチゴだったらイチゴの形と色と。ミニサイズのカレーだったら、あらかじめこういうものです、というのがはっきりわかる玩具が多かった」、「パズルとかもありましたし、絵本もありましたし、あとはキャラクターの玩具も多く」、「お人形もあ

りましたし、音が出る、音楽が流れるものとか、楽器とか、そういうものが圧倒的に多かった」と振り返り、「既成のものは、それはそれだって決まっているので、そこから逸脱することはあまりなくて、例えばカレーライスだったら、これは絶対カレーライスと概念が子どもたちの中にあたりしました」と既成の遊具の見立て幅の限界性を指摘する。一方、シュタイナー幼稚園における遊具は自然の素材であり、「装飾がないと、何にでも見立てられるので、発想するという点では、何も無い方が発想の幅がある点が違うなと思いました」と自然素材が想像力の育みに寄与する力を認めていた。

また、異年齢保育の在り方が、子ども同士の模範と模倣の関係性を生んでいることにも着目している。実習生 Y は、「縦割りなので、異年齢のかかわりがすごく自然で。生活していく中で 気の合う友達というのはできて、ある程度は固まって遊んだりしていましたが、それでも他のグループの遊びを見て、私たちもやってみたいと真似て遊ぶ模倣、模範みたいなのところにつながるんです」と述べ、子どもたちの生活の中に模範と模倣を通した遊びが浸透していることに気付いていた。

教育実習の楽しみの第三は、保育者の「個々に対する援助」の在り方について学ぶという点である。M 幼稚園では毎日のように近くの土手まで散歩に出かける。実習生 Y は、「毎日のように多摩川沿いの土手に遊びに行ったときに、一緒に走ったり、何か遊びをしたということ」が印象的だと述べる。1 クラス約30人の子どもたちを担任2人と補佐2人で土手に遊びに出向く。土手に着くと皆で一緒に遊びを行う。その後、子どもたちは、追いかっこ、土手の植物摘み、花の王冠づくり、虫を探したり追いかけたりと様々に遊び、保育者は分かれて子どもたちの遊びを見守ったり、共に遊んだりする。このような遊びの姿について、「独自というより、その場を利用して遊んでいました」と捉えている。特徴的な点は、土手に到着すると皆で表現遊びの一つとしてのわらべ唄を唄うという点である。この点について実習生 Y は、「必ずサークルになって丸を囲んで唄を唄うというのが違うなと思いました」と述べる。土手への散歩は天候を見計らい週に3～4回は行われる。シュタイナー幼稚園では、散歩には社会性を養成する意義があると草創期より捉えられている。グルネリウスは著書『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』の中で、「先に着いた者たちは、『普通に歩いてきた者たち』が到着するまで、そこで待っていなければなりません。一中略一無鉄砲な子供はきまった目標に従うことによって、自己抑制を学びます。待つことによって、ゆっくりとやって来る者たちへの思いやりを身につけます。同時に自分自身にとってもよいことには、急いで走ったあと、呼吸をととのえ、休みをとることができます。ゆっくりと楽しくおしゃべりしながら歩くことの好きな子供たちにとっても、好みにあった散歩ができるのです」<sup>16)</sup>と散歩の意義を示している。

（3）これまでの保育所実習での経験が「生きた点」及びこれまでの経験では「補えない点」について

実習生 Y が、これまでの保育所実習での経験が生きた点について認識していたことは、子ども

との出会いを果たす場面において、さりげなく子どもの遊びに入っていくことや、言葉かけを行い、会話を展開させていくことであり、言葉を用いた子どもへの接近についてである。時に喧嘩やトラブルが起こったときに仲裁に入り、双方の話を聞いてコミュニケーションを取る中で解決へと導く方法等についてもこれまでの実習が生かされている。遊びが広がり発展していくことを意識して遊びの提案ができたこともこれまでの経験があったからこそと認識している。

一方、これまでの実習経験では補えない点については、シュタイナー幼稚園の独自性という点から語られた。例えば、「サークル活動」といういわゆる朝の会の場面であるが、「自分も初めてなので、子どもたちの方がよく知っているので、そこは私が子どもを見て学んだところがありました」と述べる。サークル活動では、「ライゲンと、ろうそくを囲んでお祈りをしたり、手遊びを一緒にやりました」と述べ、例えば、手遊びにおいても一般的な手遊びとは異なり、「小鳥とか、動物などの動きを手で表現して、唄にのせて表現したり、自然のものを手遊びの中で表現したという感じです」、「動作も静かででしたし、声色も穏やか落ち着いて、声を張り上げているのではなくて、本当に自然の中で動物たちがどういう風に動いているのかを動きと声とで表現してた感じです」とその特徴を示した。このような手遊びの意図について実習生 Y は保育者に質問をしている。実習生 Y は、「声を張り上げてなくても子どもたちはちゃんと聞いているし、むしろそっちの方が子どもたちも落ち着いて聞こうとして聞いているから集中力も上がるし。聞くというのはすごく大切で、集中にもなる」とシュタイナー幼児教育で重視する「聞く」という特性について学んでいた。この点について実習生 Y は、「手遊びの概念が本当に崩れた」と述べる。手遊びやライゲンには多くの種類があり、「今まで触れてきたのが全く出てこなくて、それが意味一般的ではないので、毎回毎回“はじめまして”の手遊びがいっぱいあって、いろんな手遊びを知っていたつもりだけれど、まだ知らないのもあったという驚きがありました」とこれまでに経験のない手遊びやライゲンの幅の広さに驚きを感じていた。ライゲンも「5月のテーマ」を体験しており、その内容は、「若葉とか、青虫とか、植物がこれから成長していく、生物が育っていくような成長のはじまりのテーマが多かった」とその特徴を捉えていた。こうした手遊びやライゲンは相互に関連しており、一貫したテーマのもとに保育が構築されていることに気が付いていたと言える。

#### （４）印象的な「保育の内容」について

印象的な保育内容について実習生 Y は、「子どもたちの意思を大切にした保育」と述べる。例えば、制作の際、保育者は制作のイメージは持ちつつも、たとえそのイメージとは異なる状況であったとしても子どもの創造性に共感する場面を捉えていた。また、配慮児との関わりについての事例を挙げている。雨風の強い日の土手散歩の際に、強い風に当たることを苦手とする子どもに対して保育者は、「この子と一緒に物陰に隠れて」と実習生 Y に依頼したという。そこで、小さな建物に子どもと実習生 Y とで身を寄せ、子どもの気持ちが落ち着くのを待ったとのことであった。このような状況を経験し実習生 Y は、「一緒に行動してみるけれど、ちょっと難しそうだったら、一旦

落ち着く時間を作るというのも、気持ちを大切にしている」と述べ、子ども一人ひとりの気持ちに寄り添いながら、その子どもの意志を尊重した行動と判断を行っていることを学びとしていた。

「意志」という言葉は、保育者の中でも頻繁に用いられ、「本当にその子どもの考えというのを汲み取ろうということもありましたし、先生方も一人ひとりの特性、性格をちゃんと熟知して、その上でこういう対応を取ってみよう」と深く考えていたような気がします」と述べ、シュタイナー幼稚園では、「それがより一層、一般的な園よりも強調されて、保育が行なわれているのがシュタイナー保育と言ってもいい」と「意志の教育」であることを確信していた。

#### （５）保育者の印象的な「援助場面」について

実習生 Y が保育者の援助として印象的と捉えた第一の場面は、「オイリュトミー」であった。これはシュタイナー教育特有の保育内容であり、義務教育以降は正科として位置付けられている。実習生 Y にとっては初めて目にする活動で、見学を主として参加した。オイリュトミーの時間には、「オイリュトミーをしている時にはなるべく頑張ってその活動に参加してみようとする援助というか、そこが普段とは世界観が違うと思いましたし、一気に場の雰囲気が一瞬で変わって」、「無地の黄緑色の服を着ていて。普段子どもたちは私服なんですけど、その時は黄緑色の服を着て。ちょっと細長い棒を使ったりしていました。違う世界に入ったみたい、ちょっと不思議な感覚はありました」とオイリュトミーという特別な時間・空間であることを捉えていた。オイリュトミーに参加している子どもは、「いつもと印象」が違い、「すごく集中」して取り組んでおり、「特別な時間」と感じ取っている点を捉えていた。オイリュトミーは専門の講師が担当しており、保育者はオイリュトミーを子どもと一緒にやる立場となる。

保育者の援助場面で印象的だった第二の観点は、子どもとの関わり方の特徴であった。その関わり方について実習生 Y は、「室内で遊んでいる時に、子どもたち同士が集まって各々好きな遊びをするんですけど、一つのグループにいるのではなくて、点々と回って、子どもたちの遊びの中に入って行って、遊びの発展をするために色々な道具とかコミュニケーションを持ちかけて援助していたように感じます」と述べる。保育者は子どもたちの中に入っていくが、その関わり方は、保育者が積極的に参加していくというよりは、子どもたち同士の遊び、コミュニケーションを大切にしていたこと、保育者は「さりげなく参加」して、「子どもたち同士の遊びを尊重するような援助」であったことを捉えている。そのような援助の在り方は、声掛けの在り方にも反映しており、「聞こえるか聞こえないかくらいの声」であり、「子どもたちを集めて前に立って張り上げてしゃべることがない」援助方法である。実習生 Y は、「私、声大きいって言われたんですよ、実習中に。声が響いちゃうからもうちょっと抑えめでしゃべっていいよって言っていただいたりして」と指導の様子を説明した上で、その意味について、「大きい声を張り上げて注目してもらわなくて、ちゃんと聞いてくれるから、わざわざ大きい声出さなくても子どもたちはしっかり聞いてくれるという風におっしゃって」と子どもの本性とそれにふさわしい援助の意義を確認している。声が大き

いと認識している実習生 Y にとって、普段よりも控えめな声を意識することに苦戦したようであるが、実践してみた結果、「大丈夫でした」と述べ、「私も慣れましたし、普段子どもたちもそういうしゃべり方と言いますか、雰囲気というのは理解しているので」と幼稚園生活における声の在り方について新たな気づきを得ていた。

保育者の援助場面で印象的だったもう第三の観点は、援助における「模範と模倣」の関係性であった。登園時に保育者は、「手作業」をしながら子どもを迎え入れる。保育者は座って手作業をしているため、登園した子ども自らが保育者のそばへ来て挨拶を交わす。このような場面について実習生 Y は、「室内遊びをするときに、担任の先生が二人くらいいて、一人は手作業みたいのをしてるんですよ。子どもたちの遊びに入るんじゃなくて、子どもたちの玩具を作っていたり、ちょっと手作業してたりして」と説明する。この意味について実習生 Y が保育者に尋ねると保育者は、「先生のしぐさを見たりしてやっぱり真似をしたい」と、子どもは模倣への関心と取り組みへの意欲を持っていることが説明され、「先生の手作業とかを見て、私もやってみたいという子が実際にいて、やっぱり大人の動きをしっかりと見ているんだなと手作業している様子を見られた」と子どもの模倣性の実態を捉えている。また、外遊びの場面においても、「園庭で砂遊びをしているときに、一緒に砂を使って、砂でものを作るんですけど、先生が何か作っている様子を見て、子どもたちも先生と一緒にものを作りたいというのがありました」と模倣の具体的場面を捉えていた。保育者の特徴は、「黙々とやっている」ことであった。実習生 Y は、「さりげなく遊びに入っていくって、でも黙々と作って。それに子どもたちが気付いて真似をしてというのもありました」と述べ、子どもの模倣性を尊重した保育が、シュタイナー幼稚園における教育方法論として通貫していることを学びとしていた。

#### （6）指導案の作成と実践について

一般的な幼稚園における教育実習と同様に、M 幼稚園において実習生 Y は指導案を作成し、責任実習としての部分指導を体験した。対象は4・5歳児合同クラス31名である。部分指導の内容は制作「はじき絵」とした。そのねらいは、「好きな色を使って画用紙に自由に色付けをする」、「自分の作品や友だちの作品を見て良さに気づく」とし、活動内容は、「クレヨンで絵を描き、その絵に合う色を選んだり、色同士の組み合わせを考えたりする」、「はじき絵をしながら、友達の作品を見て感想を言い合い楽しむ」ことを設定した。この活動を選んだ背景として、M 幼稚園では通常の保育の中でのじみ絵の経験があることから身近な活動であるという点と、クレヨンを用いて絵を描いたり、自分の作りたい作品を思い浮かべながら集中して取り組む姿があったことによる。

また、保育者からの提案で、「クレヨンで描く絵をシャボン玉に見立てて飛ばしてみる」というアドバイスも受け、日常的に取り組んでいるにじみ絵をアレンジした形で取り組むこととなった。実習時期の5月は、様々な植物が芽吹き成長を図る時期であると共に、穏やかな空気や風を感じる季節である。シャボン玉を空に飛ばすイメージは、こうした季節を実感させることに結び付く。

実習生 Y は子どもたちに見本を示した後、子どもたちは画用紙に大きな丸や小さな丸など好きなように描くが、用いるクレヨンが「白」であり、画用紙も「白」であるため、「絵がはっきりとわからない」という子どもの反応も予測している。白のクレヨンで描き終わると、通常のみじみ絵で用いている赤、青、黄色の三色の絵の具で色を重ねていく。すると白いクレヨンで描いた絵が浮かび上がってくる。子どもたちは浮かび出る絵に驚きと喜びを感じ取っていた。この三色を用いてにじみ絵を行っている経験から、絵の具を塗っていく活動はスムーズに進んだ。この活動後、実習生 Y は、「はじき絵の活動では、子どもたちが意欲的にクレヨンや絵具で色付けを行っていたため、非常に安心しました。クレヨンでシャボン玉を描き、絵具で色を塗るときに、私のイメージだと画用紙全体に色を塗ってくれると思っていましたが、しゃぼん玉の中を塗る子どもが多かったため、これはそれで良いと思いましたが、事前に塗り方の実演をしても良かったと思いました」と振り返っている。こうした活動の状況から、M 幼稚園の責任実習としての部分活動は、シュタイナー幼児教育の取り組みに沿って内容が選択されると共に、実践時期のテーマに意義付けながら展開されていることが明かとなった。

#### （7）日誌から見たシュタイナー幼児教育の特色について

本学における教育実習日誌は複数の様式を設定し、実習園での指導に合わせ選べる形式を採用している。日誌の様式「時系列全体記録一様式1」は、一般的な時系列の形式で、「本日の実習課題」、「時間」、「子どもの姿と環境」、「保育者の援助と配慮・実習生の動きと気づき」、「考察」等を記入するものである。実習生 Y は、実習開始1週間は様式1で記入している。「時系列部分記録一様式2」は、時系列の記録ではあるが、環境構成図を書く部分が広く取られている点が特徴である。実習生 Y は、実習2週目より適宜用いている。「エピソード記録一様式3」は、「本日の実習課題」、焦点を当てる「環境構成図」、枠の少ない「日課（時系列）」、「エピソード記録」の構成となっている。実習生 Y は、実習2週目より適宜様式2と共に使用している。

シュタイナー幼稚園ならではの記録について、実習生 Y は「誕生日会」を取り上げた。5月中旬に行われた誕生日会について様式2を用いて記録している。実習課題は、「誕生日会を一人ずつ行う意味を参加しながら理解する」とし、環境構成図「午前の誕生日会の環境構成」として次のように示していた（写真1）。4・5歳クラスの保育室において10:20~11:00までの時間帯で誕生日会が行われている。対象児は、4歳児 N である。保育室には、丸く椅子が並べられ、その中には黄色の布を被せた円卓を置き、その上に母、父、子を模した人形、6本のろうそく、4歳児 N の保護者（母親）からのメッセージカード、プレゼント（保育者の手作り）が置かれている。4歳児 N の他に二人の子どもがアーチを持つ係である。4歳児 N は黄色の布で身をまとい、金色の冠を被る。アーチを持つ二人の子どもも金色の冠を被る。保育室は扉とカーテンを閉め、薄暗い。

誕生日会の流れと内容は次の通りである。4歳児 N と事前に決められたアーチを持つ子ども二人（妖精役）は、保育者の後ろで待機する。クーゲルが鳴ると子どもたちはそれぞれ所定の椅子に座

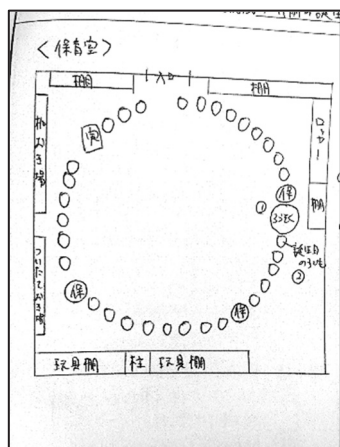


写真1 誕生日会環境図（日誌より、筆者撮影）

べる。保育者より誕生日会を終える旨が伝えられて終了となる。

実習生 Y は、「一般的な園では5月だったら5月の子たちでまとめてやっているんですけど、M 幼稚園ではちゃんと一人ずつやる」と述べ、日誌には、「一人ずつ行う誕生日会でしたので、非常に新鮮でした」と記述されている。対象児である4歳児 N の姿を見て、「会が始まる前から肩が上がっていて緊張していたのではないかと思います」と子どもの姿を捉えている。それは子どもにとっての「特別」を意味するものでもある。会のはじまりは「クーゲルの音」が合図となっていたが、クーゲルを鳴らすことで「部屋の雰囲気が一気に変わった」と実習生 Y は記述し、非日常的な音が、日常生活と特別な日を区別し、「空間が引き締まる」と捉えている。両親が付けた名前の由来が語られる場面があるが、実習生 Y は、「名前をどういった思いで付けたのかを知ること、自分の名前をより好きになるだろうし、母親の想いも伝わってくると思いました」、「何よりも自分や友達の名前を大切にしようという意識もおのずと芽生えてくると思います」と述べると共に、保護者からのメッセージや保育者手作りのプレゼントもその子どものために向けられたものであることを「特別感を出す要素」と捉えていた。このようなシュタイナー幼稚園における誕生日会の意味について保育者は、誕生日の子どもだけではなく、周りの子どもにとっても友達の誕生日を祝える「喜びの一日」であること、誕生日会の前日から準備をし、当日は特別な服で参加するというように「特別な良い時間」とであると認識する。年長児の誕生日会では、誕生日を迎えたその子どもの保護者が朝から幼稚園に来て遊びから誕生日会まで参加し、誕生日会の場面では、子どもの生まれた時の様子や1歳から5歳になるまでの成長を語ることもあるとのコメントも得ている。こうしたシュタイナー幼稚園の誕生日会の経験を通し、実習生 Y は、「一人にフォーカスしてちゃんとその子のために祝っているというその状況」に保育内容としての誕生日会の意義を捉えていた。

る。クーゲルが鳴り終わると保育者は唄をうたいながら4歳児 N はアーチをくぐり、着席する。保育者は4歳児 N の誕生について話をした後、4歳児 N の保護者（母親）から届いたメッセージを読み上げる。続けて保育者は4歳児 N の名前の由来を話し、ろうそくに火を灯した後、誕生日の唄をうたう。4歳児 N にろうそくとプレゼントが手渡され、4歳児 N は6本のろうそくの灯の一つずつ吹き消す。一本ずつろうそくが吹き消されるたびに、「1歳」「2歳」と数える子どももいる。再び誕生日の唄をうたう。その後、一人二枚のビスケットが配られ皆で食

## （8）シュタイナー教育の魅力について

教育実習園が決定された当初、実習生 Y はシュタイナー幼稚園において実習を行うことに対して戸惑いを抱いていたが、シュタイナー幼児教育の特質をつかむ学びとなっていたことがその語りから捉えることができた。実習生 Y は、シュタイナー幼児教育の特徴の一つとして、「落ち着いた環境」を挙げている。シュタイナー幼稚園の環境には、音、色、光、保育の流れ等の多様な側面において落ち着いた環境が常にあり、そのような環境の中で過ごす子どもは、「本当に心穏やかに日々を生活できている」と実感している。遊具なども含めた「自然」が生活の中にあり、「情緒豊かな環境で、豊かに過ごせているところ」が魅力と言う。また、毎日同じことが繰り返される生活のリズムや、静寂さの中でお祈りをしたり詩を唱えたりすることは、「心を落ちつかせられる時間」と捉えている。午前の時間には体を十分に動かし、午後には制作活動や粘土遊びなどが取り入れられ、「静と動のバランスは良く交差されている」ことも実感していた。保育室の中に「刺激物がない」とも指摘し、「目に入る情報が少ない分、普通に座っていても刺激物がない分、気持ちが落ち着く」と保育環境の特質を捉えており、他の保育には見られない魅力であると考えていることがわかった。

## 5-3. 「実習後」に関する事項

シュタイナー幼稚園という特質ある場所で1か月間の教育実習を行った実習生 Y は、総体的にシュタイナー幼児教育をどのようなものと捉え理解し、学びとしたのであろうか。ここでは実習を終えた事後の振り返りに基づく語りをまとめた。

まず、「シュタイナー幼稚園での実習によって変化した点」についてである。最も変化したと認識している観点は、子どもを取り囲む環境の「刺激」に対する考え方であった。これまでの実習経験から実習生 Y は、子どもの生活する環境に様々な揭示が存在することは「通常」であると考えていたが、シュタイナー幼稚園での実習を経て、「壁に物があるというか、視覚的に刺激がありすぎると逆に違和感」という感覚が生じてきていた。その背景には、子どもには「見立てる力」があるということ、子どもには「模倣する力」があるということが根拠となっている。つまり、子どもの内側から生じる様々な力が物の存在をいか様にも変化させ、多様な物を作り出すという子どもの本質理解が進められたことが推察される。遊具においても「玩具に必要以上に装飾はいらない」、「玩具もあえてキャラクターを選ぶ必要はない」と物に対する情報量の少なさの意義と必要性を捉えていた。こうした様々な見立てが可能となるのは、語らずともそばで真摯に取り組む保育者の姿があるからであり、また、4・5歳児の縦割りという生活における年齢の幅が、子どもの模倣力の育みにつながっていることも意義ある観点として見出していた。

シュタイナー幼児教育の意義を多様な観点から認めてきた実習生 Y であるが、シュタイナー幼児教育の課題はどのように捉えているのだろうか。実習生 Y は、「強いて言えば」と前置きをした

上で次の2点について考えを述べた。

1点目は、保育者の「時間の捉え」についてであった。保育室に時計はなく、保育者自身も時計をしていないため、実習生として時間を捉えることが難しかったということである。保育者からは、「タイムキープは保育者」というアドバイスを受けている。保育の進行については、例えば、室内遊びを終えるときに保育者が唄をうたいながら片付けを始める行為自体が時間の区切りとなる。実習生 Y は、「先生が自然に、唄を小さな声で唄い出すとそれをふと気づいてそれをやっていくっていう、それが彼らにとっては時計と言うか、それが活動の区切り」と説明する。これも保育者の模範と子どもの模倣の原則で成り立つ保育方法と言える。実習生 Y は、こうした保育者の先導的で模範的行動の在り方を理解・尊重しつつ、小学校への移行等を考えた時に、「時間を見て行動するというのは、今後社会に出たとか、集団行動をする中どうしても必要になってくる」という理由のもと、年長クラスにおいては取り入れても良いのではないかと考えていた。

2点目は、子どもの「字」に対する興味に関してであった。中には字に関心がある子どもがおり、制作時に字を書いている子どもがいたとのことであった。保育の中では文字を表記することはなく、子どもの想像する事象をイメージとして表すことが重要となる。絵本もシュタイナー幼稚園には設置しているケースは少ない。シュタイナー幼稚園において絵本の読み聞かせに代わり、素話が入り入れられている。つまり幼児期には「聞く」という行為が、発達としてふさわしいあり方と捉えるからである。しかし、家庭に戻れば文字に触れる機会は多くあり、そこで M 幼稚園では、家庭に向けた「絵本の読み聞かせについて」という資料を作成・配布し、重要な点を説明している。資料によると第一に、子どもが情景を想像できるような語りを意識すること、第二は、話を変えることなくそのまま読むこと、第三は、読み終わった後の余韻を大切にするために感想は求めないこと、第四は、絵本の内容について質問をせず絵本の筋が切れてしまわないようにすること、第五は、子ども自身が絵本から感じていることを大切にするために教訓的な言葉を加えないこと、第六は、同じ本でも子どもからの要望があれば何度でも読むこと、第七は、一冊を丁寧に読むこと、第八は、大人が絵本とゆっくり向き合える時間のタイミングを作ること、第九は、様々な絵本に触れてお気に入りの絵本を持つということ、である<sup>17)</sup>。

実習生 Y が捉えた時間の観点は、「概念的な思考」の形成に係る観点と捉えられる。シュタイナー幼児教育はこのような概念的な思考力を育むためには、まず、「将来、思考能力となって花開くための要素を、まず育成すること」<sup>18)</sup>をしなければならない。人間の成長は、「幼児のばあい、まだまだ全く幼児自身の行動の、意志的な要素として存在しています。この同じ要素が、小学校時代になると、想像力に担われた感情世界のなかに移行し、そして最後に概念による思考能力、判断能力になるのです」<sup>19)</sup>と説明される。幼児期において重要なことは、健全な身体形成に伴って直接的に働く意志を育てていくことにある。そのためには、概念的な思考での判断・行動を選択する経験ではなく、信頼する人への接近から、様々な行動を真似る意欲を保育者が見守ることで、人間への畏敬の念を学んでいく過程を選択することがシュタイナー幼児教育の使命でもある。実習生 Y は、

1 か月の実習を通してシュタイナー幼児教育の意味と意義の理解に邁進したが、シュタイナー幼児教育の実践行為とその背景にある人間学的な意味のつながりを一層進めていくことにより、実践の意義を深く認識できるものと推察する。

## 6. まとめ

本稿では、シュタイナー幼稚園において教育実習を行った実習生 Y からのヒアリングを通して、シュタイナー幼児教育にどのように向き合い、何を学びとしてきたのかを考察してきた。その結果、実習生 Y は、実習開始以前において、シュタイナー幼児教育に対する内容の「特殊性」や方法の「絶対性」を「気難しい」、「扱いが難しい」教育という印象を抱くことから始まっていたことがわかった。しかし、教育実習が進むに連れ、自然な素材を取り入れた物的な環境が、子どもの想像力を膨らませ、様々なものに見立てる力を形成していることや、保育者が模範的な行動をすることで子どもは模倣して学びとしていく姿、保育者の語りかけるような穏やかさや静寂さが子どもの生活を落ち着きあるものへと導いていたこと等、シュタイナー幼児教育の様々な特質に気づき、それを意義あるものとして捉えていたことが明かとなった。また、シュタイナー幼児教育に特徴的なお絵かき（水彩画）、誕生日会、ライゲン、オイリュトミーなどの保育内容にも触れ、子ども一人ひとりを尊厳した内容構成となっていることを学び取っていることが示された。

実習生 Y の就職先は保育所となったが、シュタイナー幼稚園での実習経験が、進路決定の要因となっていたこともわかった。勤務先の保育所における幼児クラスは縦割りが採用されていること、子ども一人ひとりの考えや発想を大事にしていること、遊びを中心とした保育であることが、その決定要因である。シュタイナー幼稚園での縦割りの保育の在り方は、実習生 Y にとって子どもの成長に寄与する有意義な方法と認識されている。そして教育実習が終了した時点では、「最初に感じていた壁は全然なく」と述べ、シュタイナー幼稚園の教育について深く共感する結果となった。

シュタイナーの教育思想に基づく幼児教育という一見、個性的で限定的な保育のイメージがある一方、我が国の保育者養成における教育実習という位置づけの中で、シュタイナーの人間理解に基づく保育内容・方法を学ぶことは、保育の価値に深みを持たせ、幼児教育の本質を考える要素を多分に含んでいることが示された。本稿では、実習生 Y の語りを中心に分析を試みたが、今後は、文字記録等も用いて教育実習を通した学びの質的な観点からの調査を試み、シュタイナー幼児教育の本質に迫ることを課題としたい。

## 引用文献

1) 教育職員免許法第2条

[https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=324AC0000000147\\_20250601\\_504AC0000000068](https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=324AC0000000147_20250601_504AC0000000068)

閲覧日：2024年3月12日

2) 教育職員免許法第3条

[https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=324AC0000000147\\_20250601\\_504AC0000000068](https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=324AC0000000147_20250601_504AC0000000068)

閲覧日：2024年3月12日

3) 文部科学省 教職課程コアカリキュラム 附属資料 p.48

[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442\\_2\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_2_2.pdf)

閲覧日：2024年3月12日

4) 嶺町幼稚園ホームページ

[https://www.minemachigakuen.com/at\\_first/policy/](https://www.minemachigakuen.com/at_first/policy/)

閲覧日：2024年3月12日

5) 前掲資料4)

6) 高橋弘子, 1995, 『日本のシュタイナー幼稚園』, 水声社

7) Waldorf World List2024 pp.97-100

①うめのもりヴァルドルフこどもえん (愛知県)

②にじのもり幼稚園 (愛知県)

③賢治の学校福岡たんばほこども園 (福岡県)

④ヴァルドルフキンダーガーデンうみのこびと (神奈川県)

⑤横浜シュタイナーどんぐりのおうち (神奈川県)

⑥横浜シュタイナーこども園を育てる会 (神奈川県)

⑦青葉シュタイナー子どもの家 (神奈川県)

⑧こども園まきば (三重県)

⑨レインボーヴァルドルフキンダーガーデン (宮城県)

⑩シュタイナー療育センターひかりこども園 (長野県)

⑪シュタイナー浦和保育園 (埼玉県)

⑫キンダーガーデンなのはな園 (東京都)

⑬南沢シュタイナーこども園 (東京都)

⑭東京賢治シュタイナー学校キンダーガーデンたんばほ子どもの園 (東京都)

⑮山形賢治の学校おひさまえん (山形県)

[https://www.freundewaldorf.de/freunde/fileadmin/user\\_upload/images/Waldorf\\_World\\_List/Waldorf\\_World\\_List.pdf](https://www.freundewaldorf.de/freunde/fileadmin/user_upload/images/Waldorf_World_List/Waldorf_World_List.pdf)

閲覧日：2024年8月16日

8) 前掲資料4)

9) E・M グルネリウス, 高橋巖・高橋弘子訳, 1999, 『七歳までの人間教育 シュタイナー幼稚園と幼児教育』, フレーベル館, p.66

10) 前掲書9) p.61

11) 前掲書9) p.64

12) 嶺町幼稚園パンフレット「嶺町幼稚園のご案内」

13) 一般社団法人日本オイリュトミー教育芸術協会 ホームページ「設立趣旨」

<https://eurythmy-japan.org/>

閲覧日：2024年8月16日

14) 一般社団法人日本オイリュトミー教育芸術協会 ホームページ「幼児期のオイリュトミー」

<https://eurythmyjapan.org/eurythmy/%e5%b9%bc%e5%85%90%e6%9c%9f%e3%81%ae%e3%82%aa%e3>

%82%a4%e3%83%aa%e3%83%a5%e3%83%88%e3%83%9f%e3%83%bc/

閲覧日：2024年8月16日

- 15) 資料「学校法人みねまち学園 嶺町幼稚園の概要」
- 16) 前掲書9) pp.67-68
- 17) 資料「絵本の読み聞かせについて」
- 18) 前掲書9) p.30
- 19) 前掲書9) p.30

## 謝 辞

本稿の執筆にあたり、シュタイナー幼稚園において教育実習を行った実習生 Y さんにおかれましては1時間半にわたるヒアリングにご協力していただくと共に、実習での学びの資料をご提供いただきました。また、M 幼稚園園長齋藤晴彦先生には、ヒアリング内容に基づく論文執筆及び掲載の許可を頂くと共に、保育内容に関して詳しくご説明をいただきました。この場をお借りしてご協力いただきましたことに心より感謝申し上げます。